

大島隆著「編集雑記 - 時事評論、薄くても一冊読了の満足を - 」

時事評論 2010年3月号 内外情報調査会、時事通信刊を読む

文章を書き続けること

中学3年生だった、今から50年前の日記に「私の意気ごみは大学へと変わった」と記してある。そう、ある日、ある人との偶然の出会いが私のその後の人生を決定づけた。

当時、庶民にとって大学は高嶺の花で、兼業農家に生まれた編集子は県立工業高校の電気科または機械科を志望していた。昭和35年12月28日、故郷の友人宅で遊んでいたらその友人の、都内在住の友人が自転車で現れ、小生に「高校はどうするの」と言うので、「工業高校か東京電力などの企業内社員養成所を受けるつもり」と説明すると、「工学部には高校からも進学できる。高校はまず普通かを目指せ」とアドバイスされた。

その一言で頭の中はパニックに陥った。後日、両親に話したら理解してくれ、地元の高校普通科に進学した。ここで人生の第?ラウンドが待ち受けていた。数学が全く駄目なのである。進路希望を理系から文系に変更した。

元来、文章を書くのが好きだった。将来は作家になればと思い、新聞記者になって文章の勉強をしよう、と大学は、私大の新聞学科に進んだ。4年後に今の会社に就職。以来、42年間、前半は現場で記事を書き、後半は管理部門に転じ、社内向け文章を来る日も来る日も書き続けた。それも間もなく終着駅に着く。現役としての人生をこのような形で終わられるのは、最高に幸せ。ありがとうございました。

- 2010年2月20日 林明夫記 -